第117号　　平成29年９月５日発行（1）

宮沢賢治記念館通信

発行　〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1－1－36　宮沢賢治記念館　☎(0198) 31－2319　FAX (0198) 31－2320

文芸同人誌『アザリア』100周年記念展

平成29年
9月2日(土)
～9月24日(日)

短編「秋田街道」の風景

文語詩のことならおもしろい

信　時　哲　郎

文語詩のことならおもしろい。しかし、そう書いてみても、なかなか信じてもらえないかもしれない。賢治が最晩年にまとめた文語詩は読みにくく、口語詩や童話のカラフルさにくらべると魅力に乏しいと感じられるのも仕方がないと思うからだ。かく言う私も、学生時代には文語詩などろくに読んでいなかったのだが、近年、「文語詩稿　五十篇」と「文語詩稿　一百篇」の評釈をひととおり終えたところで率直な感想を述べれば、「文語詩のことならおもしろい」。

例えば「一百篇」の「羅紗売」をあげてみたい。次のように始まる詩だ。

バビロニ柳掃ひしと、
あゆみをとめし羅紗売りは、
つるべをとりてやゝしばし、
みなみの風に息づきぬ。

ラシャ（厚手の毛織物の一種）を売り歩く商人が井戸で休息していたのだろう。しかし、当時、ラシャの行商人と言えば、島田隆輔氏が指摘するように、革命を逃れて日本にやってきた白系ロシア人が従事するものとされていたようだ。おそらく岩手県内の取材に基づくものであろうが、井戸で水をくみ上げているのが外国人だと思うと、ずいぶん印象が変わって来ないだろうか？

また、「バビロニ柳」の語は、シダレヤナギ（学名：Salix babylonica）を言い換えただけのように思われそうだが、井戸で水を汲んでいる人物が、革命で国を追われてきた白系ロシア人であると考えれば、バビロン捕囚、すなわちユダヤ人たちがユダ王国からバビロンに強制移住させられた史実が下敷きになっていたと想像する余地が生まれて来る。『聖書』の「詩篇137」に「われらバビロンの河のほとりにすわり　シオンをおもひいでて涙をながしぬ　われらそのあたりの柳にわが琴

をかけたり」とあるが、賢治の頭には、こうしたイメージが浮かんでいたようにも思えるのである。

同じく「一百篇」の「〔すゝきすがるゝ丘なみを〕」を見てみたい。

すゝきすがるゝ丘なみを、
にはかにわたる南かぜ、
窪てふ窪はたちまちに、
つめたき渦を噴きあげて、
古きミネルヴァ神殿の、
廃址のさまをなしたれば、
ゲートルきりと頬かむりの、
闘士嘉吉もしばらくは、
萱のつぼけを負ひやめて、
面あやしく立ちにけり。

ススキの丘を南風が吹きすぎると、複雑な乱気流が起こってススキがミネルヴァ神殿のような姿になったという詩で、農村のユーモラスな挿話に思える。ゲートルとは満州事変後に一般に普及した西洋式の脚絆（きゃはん）（足を保護するため足の甲からヒザまで巻いた布製品）のことだが、農夫と思われる嘉吉がゲートルを巻いているのは、大正15年以降、小学校を卒業した青年を対象とした軍事教練が始まったが、その経験者だということが反映されているのではないかと考えられる。「闘士」とあるのは、ローマ帝国の時代の人間を模した表現にも受け取れるが、次第にきな臭くなっていく日本の状況を詠み込んでいたようにも思えるのである。

当時の状況を調べてみると、いろいろなことが見えてくるという例を挙げたが、文語詩をじっくり読み込むことによって作品世界が開けてくるものもある。その筆頭に上げたいのは、これもまた「一百篇」の作品である「風底」だ。わずか二行のみの作品である。

雪けむり閃めき過ぎて、
ひとしばし汗をぬぐへば、
布づつみになふ時計の、
リリリリとひゞきふるへる。

雪の中なのに汗をかくくらいなので、そうとうな距離を歩いてきているのだろう。その瞬間に、何かのきっかけでストッパーがはずれた目覚まし時計が、包みの中から鳴りだした、という内容だ。当時の目覚まし時計は、電池で動く24時間式の時計でなく、12時間に一度ずつ鳴るゼンマイ式のものだったはずだから、ちょうどこの12時間前に、旅人は目を覚ましたのだろう。雪けむりが閃き過ぎていくのだから、まだ明るい時間帯なのだろうが、となると午前３時か、遅くとも４時くらいに目覚まし時計をセットしていたということになる。時計の行商人のようにも思われそうだが、商品の時計のネジをわざわざ捲く商人はいないだろうし、ネジは毎日捲いておかないと動かなくなってしまうことを思えば、やはり泊りがけで旅行している最中の旅人を書いた作品だということになろう。つまり、この人物は、まだ夜中とも言うべき時間からずっと行動をとり続け、今、起きてから12時間たったということを、ふいに目覚まし時計によって知らされたというわけである。壮大な自然の景観にユーモアが添えられ、しかも厳しい仕事の様子も伝わってくるという詩で、労働詩としても秀作だと言っていいかと思う。描かれているのは、重たい炭酸石灰の製品見本を持ち歩いていた賢治自身なのだろうか…

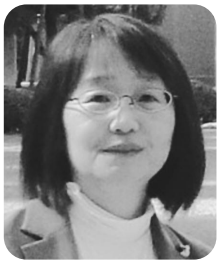
口語詩や童話は、数十年の研究の積み重ねによって、いろいろなことがわかってきた。文語詩研究は、今、ようやく始まったという段階だが、それだけに新しいことがザクザクと見つけ出されている。取っつきやすさがないことは認めざるを得ないが、お宝発見の確率はきわめて高い。宝の山を探検するための手引き書ともなる「文語詩稿　五十篇」と「文語詩稿　一百篇」の評釈は、ネットでも読むことができるようにしているので、まずは興味を引く字句やテーマのある作品から読み始めてもらえれば、そのおもしろさの一端を実感してもらえるのではないか、と思う。

（http://www.konan-wu.ac.jp/~nobutoki/papers.html）

カタクリの花

大正10年、滞京中の宮沢賢治
―国柱会と童話と―

中　地　　文



宮沢賢治にとって童話とは何だったのか、賢治はどのような考えで童話制作を始めたのか、と問い続けて三十数年になる。最近気になっているのは、大正10年の上京時の賢治と童話との関わりである。

この点については、宮澤清六氏が「兄のトランク」で語った思い出などをもとに、かつては滞京中に「一ケ月に三千枚」の童話を書き、大きなトランクに原稿を詰めて花巻に持ち帰ったと言われてきた。しかし近年は、東京で執筆した童話の原稿の特定が難しいこともあって、その話を鵜呑みにすることはなくなってきている。とはいえ、大正10年の後半から賢治が精力的に童話制作を行っていくことを思うと、賢治の童話多作の出発点は、やはり東京での体験にあったと解釈するのが妥当であるといえるだろう。

このような考えから、童話をめぐって東京で賢治がどのような体験をしたのかという問題が気になっているのであるが、その答えを得るのは容易ではない。大正10年の東京で賢治が何をし、何を考えたのかについては、これまでにも種々の検討がなされてきたが、結局のところ残されている資料は少なく、不明の部分が多いのである。そこでしかたなく、賢治と童話の問題についても、当時の児童文学界の状況といった方向に検討範囲を広げて、賢治が触れたかもしれないものは何かと想像を膨らませてゆくことになる。たとえば、大正10年６月に日比谷図書館で「童話図書展覧」が開催されているが、賢治はこれを観覧したのではないか、とか。当時の童話研究書の一冊である二瓶一次『童話の研究』（大正６年２月、戸次書店）の中に「風三郎又三郎ゴウゴツと吹いてこい！」の歌が記載されているが、賢治はこの本から刺激を受けて「又三郎」が登場する童話を書いたのではないか、とか。

周辺や背景の調査から想像を展開してゆく中で、今、特に注目しているのは国柱会と童話との関わりである。賢治自身が国柱会の高知尾智耀のすすめで「法華文学」（「雨ニモマケズ手帳」）を志したと述べていることもあって、以前から国柱会の文芸運動の調査・検討は行われてきているが、国柱会の童話については話題にされてこなかった。しかしこれは、確認しておく必要のある事柄なのではないだろうか。実際、賢治が読んでいたことが確実な国柱会の機関紙『天業民報』を手掛かりに、当時の国柱会と童話・童謡との関わりを調べてみると、興味深い状況が浮かび上がってくる。

まず気づくのは、当時の国柱会において、子どもを対象とした活動が盛んだったということである。賢治の滞京中に時期を限ってみても、２月２日付（第116号）三面に「二本榎の旭コドモ会」（式次に「訓辞」「歌劇対話」「お伽話」「余興手品」等あり）の活動が報告されているのをはじめとして、各地の「吾徒の活躍」を伝える「二陣三陣」欄に、「少年会」「日曜こども会」「コドモ会」の活動報告がたびたび掲載されている。国柱会の布教活動を伝える「昨日の上野」欄にも、「少年会員」による活動が報じられている。８月に開催された「三保講習会」のプログラムにも「少年講話」（内容は「童話等」）が入っていた。

また、その頃の『天業民報』には童謡・童話が折々掲載されていたということも目に留まる。賢治の滞京中における童謡（唱歌を含む）の掲載数は、１月・２篇、２月・１篇、３月・５篇、４月・４篇、５月・２篇、６月・１篇、７月・４篇、８月・５篇であり、その内容・特徴は宗教色を前面に出したものではなく、文芸誌掲載の童謡と同じだった。童話（お伽噺を含む）の掲載数は、１月・６篇、２月・２篇、３月・１篇、４月・０篇、５月・３篇、６月・０篇、７月・０篇、８月・０篇で、２月３日付二面・２月４日付二面掲載の杉本光子「法華経童話／衣裏宝珠（上）（下）」のように宗教色が明快なのが特色である。

こうしてみると、大正10年の東京で賢治が童話と出会う機会、童話を意識する機会は、自ら図書館に行って本に手を伸ばさなくても、展示等から刺激をうけなくても、いくらでもあったというべきであろう。

なお、さらに注目されるのは、「童話（仏様に関するもの）」の「懸賞募集」の記事（５月７日付、第195号）や、「一万五千円で脚本を求むる帝劇」（７月２日付、第244号）という話題に言及した「文芸雑記」も『天業民報』に掲載されており、

後者の文中には「懸賞脚本募集で最近に広告を出したもので中山太陽堂の童話劇募集で高が原稿紙で四十枚以下の童話劇に、一篇一千円の賞を懸けてゐる」との記述もあることである。７月13日消印の書簡（前掲、書簡195）に「書いたものを売らうと折角してゐます」と記している賢治は、このような情報を見過ごすことはなかったのではないか。

大正10年の賢治と童話との関わりをめぐって問うべきなのは、童話との出会いや童話制作のきっかけではなく、なぜ賢治は国柱会の童話・童謡、あるいは国柱会の児童文化活動に関わらなかったのかという点なのかもしれない。賢治は国柱会の童話に批判的で関わろうとしなかったのか、関わろうとしたが入れなかったのか、今また新たに様々な想像が生まれつつある。

賢治と心、思いと福田パン

有限会社福田パン　代表取締役　福　田　　潔

この文章を読んで頂くにあたり、最初に皆様にお断りとお詫びを申し上げたいと思います。

私は賢治先生について熱心に勉強をした事はなく、宮沢賢治先生という方に興味を持ち、学びたいと思い、少しずつ調べたいと思いだしたのは、ほんの半年位前からでした。

そもそも私は恥ずかしながら勉強が嫌いで、その中でも作文は、大の苦手でした。

そして現在私は、不惑の年齢と言いますが、迷いの多い心境にかられる事が多く、そのような者が書く文章ですので、読み進むにつれ、見苦しい文章になるかもしれませんが、今現在の福田パンを経営する立場の者としての思いを書かせて頂きたいと思います。

まず、福田パンの説明をさせて頂きます。

創業者、福田留吉（旧姓及川）が昭和23年５月27日（旧海軍記念日）に盛岡市長田町（現在の本店の地）に福田製パン所を開業。家族経営の規模からスタート。現在は従業員数48名、直営店２店舗、県内のスーパー、盛岡市内の病院、保育園、幼稚園、その他様々な施設等へパンを納入しております。製造品目は少なく５種類ほどで、コッペパンの製造をメインに行っており、全生産量の97％がコッペパンという、コッペパン専門のパン屋として営業致しております。

近年、128万人の岩手県民に対し、当社コッペパンの一日平均製造量が１万２千個で、だいたい県民100人に１人は食べて頂いているという事から、色々なメディアなどで盛岡、岩手のソウルフードなどと呼んで頂いております。

ここまで福田パンという会社を簡単にご説明致しましたが、何故宮沢賢治と福田パン？と思われる方も多いと思います。

当社の創業者であり私の祖父、福田留吉（旧姓及川）は花巻市小瀬川の出身で、稗貫農学校時代に賢治先生に教を乞うた生徒で御座います。私の幼少期の記憶に、祖父が晩酌をし、その膝で賢治先生の話を聞かせてもらった事を覚えています。

山歩きに連れてってもらった事、その折おやつをご馳走になった事、歌等も歌った事を聞かせてもらいました。

祖父は農家の末っ子に生まれ、家に自分の耕す田畑もない身分ではありましたが、勉強は好きだったようで、賢治先生に卒業後は盛岡高等農林（現岩手大学）に進学を進められたそうですが、しかしながら農家の末っ子、進学の費用が工面出来ないとなると、先生自ら盛岡高等農林へ何度も足を運び、高等農林の先生の助手の仕事を紹介して頂いたそうです。そこで助手として働きながら学生達と一緒に発酵や醸造などを学ばせて頂き、その後大阪衛生研究所を経て、当時東洋一の大工場と言われたマルキ製パンが起こしたマルキイーストの研究室（京都）に就職をし、酵母菌の研究をしておりました。

やがて終戦に至り会社の解散整理を見届け、故郷の岩手に戻り、さあどうやって家族を養うか、祖父は酵母菌の研究をしていた折に、パンの試作もしていたのでパン作りの経験を活かし、パン屋の開業に至ったという事です。

その後、昔お世話になった岩手大学の売店と取引させて頂ける事になり、お腹を空かせている学生達に安く、栄養も取れ、空腹を満たしてあげたいとの思いで、大きなコッペパンを作り出したそうです。

牛乳一本と何も挟んでいないコッペパン一個

で、ごはん二膳と味噌汁一杯分のカロリーが取れるようにと計算した大きなコッペパン、祖父の学生達を思いやる気持ちから誕生した、コッペパンであります。

今では「ソウルフード」と言われ、多くの人達に食べて頂けるようになりました。

私達はパン屋ですから、パンを作るのは当たり前、味も美味しさを求めるのも当たり前、良い接客とは、より良いサービスとは、それらを追及するのも当たり前の事であります。

私は経営者でありますから時には鬼となり、社員に辛い労働を強いて、売り上げを確保し、利益を出さなければならない事も当たり前なのです。

社員とその家族の幸せを考えるのも当たり前、充分解っているつもりですが、当たり前の事をするというだけでも大変ですし、辛いと思う事も多々あります。

しかし、祖父がした事はもっと大変な事だったのではないかと思うこの頃であります。

物資の豊富ではなかった時代に、目の前の相手を思いやりその人の為に何が出来るかを真剣に考え実行した結果の大きなコッペパン。

未だ少しばかりですが、賢治先生について興味を持ち、知りたいと思い始めた頃に見えたものは、賢治先生の心の闇の部分ばかりでした。

世の中の理不尽、不公平、それらを嘆き悩む心の闇。賢治記念館にお邪魔して副館長様に賢治先生は「悩んでおられたのでしょうか」と質問もしたりしました。

私自身が皆様の期待に応えるべく、日々現実の会社経営と人間としての生き方の矛盾に悩む事もあるこの頃、宮沢賢治という偉大な方の生き方に、初めて触れる事が出来たような気がしております。

賢治先生は熱心な「法華経」の心棒者で在られ、「他の喜びを自己のものとする」という常に慈悲の心で生きた方だと思います。

今回のように人に何かを伝える為に、自分と向き合い、静かに心で物事を見ようと思った時に、祖父も含め何を伝え残したかったか考えてみました。

常に「感謝・奉仕」言葉で簡潔に表すならばそうではなかろうかと思います。

先日、社員と話した中でも気付かされました。福田パンは福田家だけの物ではない、福田パンで働く社員だけの物でもない。今は福田パンを長年育てて頂いた地域の皆様と、これからも大きなコッペパンを愛して下さるお客様方との共有の物であるという事を。

お客様第一！　　社員第一！

これからも賢治先生の教えを受けた者の子孫として精進して参りたいと思います。

読者の広場　私の宮沢賢治

郷土の星、賢治さん

宮沢賢治・東和の会会員　小原 久子

私は宮沢賢治と同じ旧花巻町に生まれ、小学校も賢治の後輩にあたる。賢治の原風景の中で育ち、何となく知っているつもりでいたのだが、作品もあまり読んでおらず、かえって遠くの人たちが良く研究されているように思われる。

私が嫁いだ東和町土沢（現在合併して花巻市の一部）の小原家は日蓮宗で、二代前のおじいさんにあたる人が賢治と交流があったという。実成寺の住職をしていた小原通勝というお坊さんである。それを知った賢治と宗教について研究されている東京の大学教授から手紙をいただいたり、仙台のＫ氏は何度もいらして取材して行ったり恐縮してしまう。

平成26年に東和町にも賢治の会ができ、早速入会をした。まず最初は地元が登場する作品から始めた。成島の毘沙門天、谷内の丹内山神社などひとりで読むのは難しくても、皆で何度も読んでいると少しはわかってくる。

そして次の例会では、実際に現地に行っての研究。賢治の生きていた時代は、今ほど医療が発達しておらず、祈るしかなかったのだろうと思いをはせた。

こうして一年目は五輪峠や発電所にも出かけて賢治の作品にふれ、その足跡をたどってみた。当時は交通手段もなく、山深い道を歩いてしかゆけず、会員が口にするのは「賢治は足が速かったんだねー」「いつ寝ていたんだろう」などと、その健脚ぶりであった。

昨年は大迫町へ、そして今年は石鳥谷町へと行って賢治ゆかりの地をめぐり、今はやりの追体験なるものを楽しませてもらった。

例会に集まるのは12人程度のこじんまりした会であるが、皆の話を聞くのも楽しい。ゲストの参加で貴重な話を伺ったり、会員の持ちまわりで発表者になったり、皆と賢治のかかわりも人それぞれで、おもしろいものである。

毎年の新年会の余興に賢治の作品を読んでいるが、地元ならではの強みに方言がある。「虔十公園林」など花巻弁ならお手のもの。賢治も私と同じ花巻弁で話をしたり、考えていたのだと思うとうれしくなってしまう。

何にでも興味を持ち、何でも知っていた多面体の賢治は、今なお星のように光り輝き、世界中の人を魅了している。私も地元ならではを生かして星に向かって接近して行きたいと思う。

青ノ木森で賢治さんに助けられました

石鳥谷賢治の会会員　若松多恵子

平成26年５月31日。大瀬川歴史クラブと葛丸写真クラブの仲間に入れていただき、16名と花巻賢治の会会員との合同で、青ノ木森登山という事だった。

ところで、５月23日、青ノ木森探勝会の日程変更というハガキが来ました。

○日程　事前にトイレを済ませておくこと
○出発　大瀬川振興センター９時出発
○雨天の場合　青ノ木森登山は中止として、そのかわり段々の滝、熊棚のある栗8000本見学、賢治野宿地大石権現の見学。

雨天の場合まで計画。現地調査による水も洩らさぬ調査と準備に敬意を表するばかりであった。

葛丸ダムより西方に５つの山。その１つが青ノ木森である。標高831m。木々はやっと芽吹きはじめの萌黄色が山を覆い、晴天絶好の登山日和だった。

北の股沢と西の股沢との合流点から西に進み、一寸した広場に車を止めて下車。登山道はその入口から150m先の彦堤と西彦堤沢の合流点からさらに200m右側の小道が青ノ木森への道。頂上までは１時間30分。標高500m地点から331m登ることになるのだ。

私は老齢なので、足手纏いにならぬよう前から５番目で歩く事にしていたが、ふっと頭を挙げて見たら、黒い整然とした階段がどこ迄もどこ迄も続く。頂上は？と見ると、そんなものは見えない。ただただ一直線に階段が空迄続いているように見えた。心臓はドキドキ呼吸はハアハア、そのうちにお腹が急に痛くなって来た。これはダメだ。撤退だと心にきめ下山する事にしました。鎌田アヤさんが一緒に降りて下さるとの事で二人で降りはじめました。せっかくここ迄登って来たのに申しわけないのです。後に続いていた人たちはそれぞれ呼吸を整え頑張っています。一行の最後尾の殿をつとめていた方が、私の為に二股に分かれる所まで付き添って下さり、また一行のもとへと登って行かれました。その後ろ姿はまさに賢治さんの姿でした。

東二病気ノコドモアレバ行ッテ・・・・
西二ツカレタ母アレバ行ッテ・・・・・
南二死ニソウナ人アレバ行ッテ・・・・
　ジブンンヲカンジョウニイレズニ

お陰様で無事下山。車のわきで昼食。石を枕に昼寝、すっかり元気快復。平成の賢治様ありがとうございました。

翁草

山ゆり

来館者の声

記帳ノートから

No. 359～360

三回目の訪問です。また新しい発見があり、多才な賢治に驚きと感動を覚えました。明日からの己の生き方を考えさせてくれました。前向きに宙に向かって。

幼少の頃、少し怖くて宮沢賢治さんの本を途中で止めてしまったこと（理解もできなかった）今、後悔しています。

京都より家族三人できました。自分が子どもの頃読んだそのままの絵本を山猫軒で見つけ、とても懐かしく、子どもに購入しました。記念館で賢治さんの偉業を詳しく知ることができ、興味深く拝見しました。

幼いころに感銘を受けた「銀河鉄道の夜」について、大人になって再び触れ、新たな事実や完成までの道のりを知ることができたことは大きな喜びでした。しばし時間を忘れて文学の世界に浸ることができ、心が洗われた気がしました。

作者・作品の解説に留まらず、より深く、多角的にその心象風景を探る試み・展示、非常に興味深かったです。来館後、賢治の作品を読み返したくなるすてきな記念館でした。是非また来ます。

仙台から来ました。銀河鉄道の夜やセロ弾きのゴーシュなど、小さいころから賢治さんのたくさんの作品を知ってはいましたが、初めてここにきて、賢治さんの世界観に触れて、単なる文学作品とは思えなくなりました。科学・芸術・宙・祈・農、賢治の人生全ての想いの結晶なんだと思うようになりました。うまくは言えませんが、今日ここに来れてよかったということだけです。

いつも疲れた時に、この場所に来たくなります。「雨ニモマケズ　風ニモマケズ…」この詩を読むと心が落ち着きます。そして、又、もう少し頑張ってみようと思います。ありがとうございます。

東京から家族３人できました。私は今、小６です。「触れてみよう」のコーナーはとてもビックリしました。宮沢賢治さんのアイディア・頭の良さは本当にスゴイ！

三重県から来ました。初めて来館しました。私は「雨ニモマケズ　風ニモマケズ…」が大好きです。この言葉に励まされている様な気がしてなりません。生かされているなあと、いつも思います。私は、これからもこの詩に励まされて、生きていきたいです。

京都から来ました。日本文学を専攻しているので、とても興味深く拝見させていただきました。特別展示室の「銀河鉄道の夜」の原稿の変遷の図解がとても面白かったです。

■賢治の世界ワークショップ in 盛岡

賢治ゆかりの寺巡りと福田パン社長の講演

６月14日（水）に盛岡の清養院と教浄寺を見学しました。清養院は賢治が盛岡中学五年生のとき舎監排斥運動で退寮となった際、三ヶ月ほど下宿したところです。教浄寺は盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）受験のため、大正四年一月下旬から四月まで下宿し、猛勉強したところでご住職から当時の賢治の様子をうかがいました。

また、福田パンの代表取締役の福田潔様からは、賢治の教え子であった祖父福田留吉さんとの関係や福田パンの経営方針など貴重な講話をいただきました。さらに、お土産に福田パンの「あんバター」をいただきました。ありがとうございました。とても美味しかったです。

参加者25名の方からは、「賢治さんゆかりのお寺、お庭も手入れされ樹も茂り、住職さんのお話も理解できました。」「教浄寺、柱に触れて、老後少しでも頭が良くなりますようにと願ってみました。」「教浄寺の住職からお話を聞き、賢治が猛勉強した様子が想像され、昔に思いを寄せました。」「福田パンの社長さんのお話は興味深く、新鮮でした。賢治さんとの関わり、人とのつながりを大切にしている福田さんに感心しました。」「福田パンの創業者が花巻出身の及川留吉さんと知り感動しました。なんだか福田パンが身近に感じました。」という感想をいただきました。

今後の開催事業のお知らせ

文芸同人誌「アザリア」100周年記念展

同人誌「アザリア」は大正６年～７年（1917～18年）に発行されたもので、平成29年（2017年）は創刊100周年の記念にあたります。

これに合わせ、当館のみが所蔵する同人誌全６巻と、関係資料とされる短編「秋田街道」の直筆原稿の公開も行います。

会期：９月２日(土)～９月24日(日)

＊『アザリア』の実物、「秋田街道」の直筆稿の公開は　９月16日(土)～９月24日(日)

宮沢賢治記念館開館記念講演

９月21日(木)　午後１時30分から３時

会場：多目的ルーム

定員：20名

演題：賢治童話―「子どもの文学」としての―

講師：宮 川 健 郎 氏
（武蔵野大学文学部教授、一般財団法人・大阪国際児童文学振興財団理事長）

内容

宮沢賢治の童話は、「童話」だけれど、子どもの文学といえるのかという議論がときどき起こります。それでも、「宮沢賢治のかなりたくさんの作品が、正しい意味で、子どものための文学であり、それが大人をさえ楽しませることができたのだと信じます」と言い切ったのは、石井桃子らの『子どもと文学』（1960年）でした。『子どもと文学』のこの評価が、賢治童話が児童書として広まっていく、きっかけを作ったかもしれません。賢治童話の国語教科書での教材化や、最近ずいぶん盛んな賢治童話の絵本化のことなども、にらみながら、子どもの文学としての賢治童話という問題をどう考えていったらよいのか、お話ししてみたいと思います。

賢治と樹木－童話「虔十公園林」－展

宮沢賢治作品には、松、柳、杉、栗、はんのきなど、多くの樹木をみることができます。

「木を植える」ことをテーマとした童話「虔十公園林」を中心に取り上げ、残された自筆原稿（複製）などを通して、賢治における樹木の世界を展示します。

会期：10月１日(日)～平成30年３月31日(土)

編 集 後 記

当館では、市内の小･中･高等学校を対象に「賢治の世界セミナー」を開催し、賢治さんの作品や人柄につての学びを深めています。県内外からの講師を招き、本年は17講座の開催予定です。

昨年は、宮沢賢治生誕120周年を記念して様々な記念行事や特別展を行いました。本年は生誕121周年にあたり、さらに賢治の魅力を発信し、皆様の来館をお待ちしております。